



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	紀元前後～7世紀における極東・サハリン・北海道北部の考古学的様相
Author(s)	木山, 克彦
Relation	新しいアイヌ史の構築 : 先史編・古代編・中世編 : 「新しいアイヌ史の構築」プロジェクト報告書2012
Citation	新しいアイヌ史の構築 : 先史編・古代編・中世編 : 「新しいアイヌ史の構築」プロジェクト報告書, 38-50
Issue Date	2012-03-31
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/56138
Type	report
File Information	t1ch5.pdf



第5章 紀元前後～7世紀における 極東・サハリン・北海道北部の考古学的様相

木山 克彦

スラブ研究センターの木山と申します。よろしくお願いいたします。私の本日の発表は、紀元前後～7世紀における極東・サハリン・北海道北部の考古学的様相と題しております。

対象地域は、極東と北海道地域です。具体的には、西は第二松花江流域から北海道北部にかけてとなります。また今回、このシンポジウムは、北海道の先史文化における集団系統に重点が置かれているようでしたので、大陸の集団が北海道にどのような影響を与えていたのかを考えるための話題提供をしたいと思います。具体的には、大陸の影響が認められるオホーツク文化と影響元である大陸の文化について取り上げます。またオホーツク文化に大陸の影響が認められる時期は7世紀代が非常に顕著ですが、本日の発表は、この7世紀以前の様相を、紀元前後から見ていきたいと思います。紀元前後～7世紀代にかけて大陸、サハリン、北海道では、どのような考古学文化があり、それらはどのような関係にあるのか、また時間経過とともにその繋がりがどのように変化するのか、研究現状をご紹介しますこととします。尚、対象資料は、地域・時代によって資料の多寡が少ない土器を対象としています。

本日の発表内容では、最初に紀元前後の極東の初期鉄器時代、近年では古金属器時代とも称されていますが、この考古学的様相を概観します。時代としては、紀元前後～3、4世紀ぐらいになります。次に、7世紀頃に極東全域に広域展開する靺鞨罐について少しだけ見てみます。最初に取り上げる時代からすると時間が空くのですが、両期を比較し、どのような変遷が想定できるかを見たいと思います。

そして、上記と併行する時期の、北海道北部～サハリンではどのような展開があったかを概観します。考古学的な時期区分でいえば、続縄文文化～オホーツク文化刻文期にあたります。このうちでも、靺鞨罐の広域展開の影響を受ける刻文期、すなわち、北海道に最も大陸の影響が強く見られる前代の様相が中心となります。

1. 極東における初期鉄器（古金属）時代（紀元前後～紀元3、4世紀）の考古学的様相

－1. 漢代（紀元前後）の極東地域

それでは早速極東地域の初期鉄器時代の様子からみていきたいと思います。

第二松花江流域の地域には、泡子沿類型、老河深Ⅱ期文化が展開しています（図1-a-4）。多様な器種構成を持ち、壺、深鉢、碗、高坏が主体となっています。一部にロクロ利用が認められます。この文化では、漢の搬入資料が多量、多種類に渡って出土しています。共伴するかどうかは見解が分かれています。ここに挙げた縄を使っている資料は、灰陶の縄蓆文の影響と考えられています。ロクロ利用の安定も漢の灰陶の影響と考えられています。鉄器形態、銭貨、鏡から前漢末から後漢代と比定されています。紀元1世紀～2世紀です。豊富な鉄器所有や漢

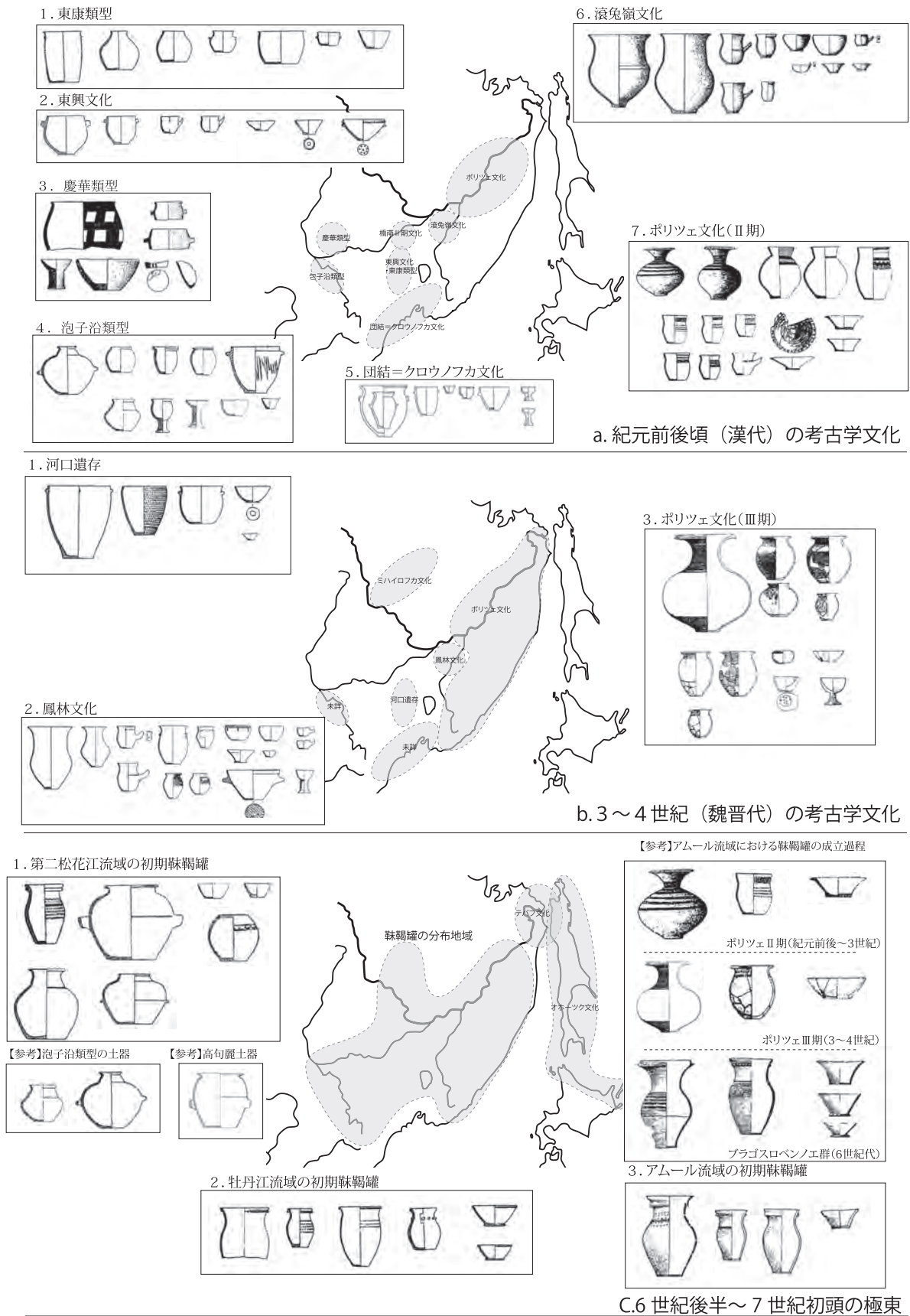


図1 靺鞨罐成立及びそれ以前の極東の考古学文化

の強い影響ですが、この時代、漢は遼東半島の付け根ぐらいに玄菟群を設置してこの地域を直接統治するようになります。また高句麗領とも接します。いわゆる「先進地域」の文物や影響がみられる背景には、このような状況が反映していると考えられています。但し、主体となる土器群は、この地域の前代の文化である西団山文化から系統を追うことが可能です。

またこの時代の極東地域には、扶余、沃沮、挹婁と社会体制、言語、習俗が異なる集団が居たことが知られていますが、扶余の推定住地に相当することから、この文化は扶余によって遺されたものと推定されています。

松花江上流域では慶華類型が該当します（図 1-a-3）。甕、深鉢、把手付きの壺、鉢、高杯、杯、多孔甑と他器種構成からなります。切株状把手、キザミ入り突帯が見られます。無文が主体ですが、赤彩文も一定して存在します。甬も出土しています。彩文、甬ともにより北にある嫩江流域の青銅器時代にあたる白金宝文化以来の伝統であり、同文化の後裔である漢書Ⅱ期文化と併行、影響関係があると考えられています。一方、壺の形状は先程見ました第二松花江流域の泡子沿類型の前段にあたる西団山文化に類似し、共伴する高杯の存在も第二松花江流域からの影響と考えられています。前漢代頃と推定されています。

松花江流域では、中・下流域では東興文化（図 1-a-2）、上流域では、東康類型が該当します（図 1-a-1）。甕、壺、鉢、坏、東興文化では単孔と多孔の甑が出土します。他器種組成となっています。東興文化は土器の特徴、特に器形や切り株状の把手は、次に見る団結文化後期との併行関係が考えられます。一方、甕の器形、角状把手等は、これも後に見ます三江平原に展開した滾兔嶺文化と関係していることが指摘されています。前漢末～後漢代と考えられています。東康類型は、鉄器量が少ないことからやや古い可能性が指摘されています。

豆満江流域、綏芬河流域、ロシア沿海地方南部には、団結＝クロウノフカ文化が展開します（図 1-a-5）。同文化は前半、後半と分れていますが、後半の時期が、多孔甑と上部が碗状の低脚高坏が指標となり、第二松花江流域との対比が可能となります。また出土銭貨から前漢代と考えられています。またこの地域にいた沃沮が遺した文化であると考えられています。起源は不明な点が多いのですが、在地の青銅器文化からなると考えられています。

三江平原南部で展開していたのは滾兔嶺文化が該当します（図 1-a-6）。球胴に大きく張る胴部に小型底部の甕、深鉢、鉢、杯を主体とする。無文が主体となる。起源は、在地の橋南文化からなります。遺跡からは、前漢代の五銖銭が出土しています。また角状把手は次に見るアムール流域のポリツェⅡ期の資料と共通し、出土鉄斧、小札の形状も、泡子沿類型に属する老河深遺跡と同型です。ですので、前漢末から後漢併行と考えられています。

ポリツェ文化は、松花江下流～アムールの合流点を中心に展開した文化です（図 1-a-7）。3期に細分されています。各期で特徴が異なりますが、Ⅱ期をみると、球胴で喇叭形に大きく開く壺、短頸壺、胴部から緩やかに屈曲し開口する深鉢、鉢、坏と他器種構成となっています。Ⅱ期の年代は、老河深遺跡と同型の鉄斧、隅丸小札が出土し、前漢末から後漢代併行と考えられています。Ⅰ期の年代は、紀元前3、2世紀頃、Ⅲ期の年代は紀元後3、4世紀と考えられています。同地域に展開していたウリル文化を継承したものと考えられています。またこの文化は、この地域にいた挹婁が遺した文化と考えられています。

以上、極東の初期鉄器時代の各文化を見てきましたが、次のようにまとめることが可能とい

えます。この時代、各地域に独自の土器文化圏が形成されており、またそれは前代から継承されてきた文化が展開していたといえます。但し、これらはそれぞれに没交渉の関係にあったわけではなく、隣接する地域文化間で交渉関係がありました。各隣接文化間で認められる一部の器種、文様等に認められる共通性が、このことを示しています。またこの時期、低脚の高杯や多孔甑がロシア沿海地方まで広域に展開しています。また鉄器も第二松花江流域を頂点として、東に行けば行くほど種類・量が少なくなります、アムール流域まで浸透するようになっていきます。この2つの要素は、漢の進出によって引き起こされたものと考えられています。このように間接的な交渉圏と広域な物流圏の両者によって結び付きを持っていた、これが後漢代まで、3世紀に至るまでの極東の様相です。

－ 2. 魏晋代（3、4世紀）の極東地域

次の3世紀には若干、変動が起きます。それが、ポリツェ文化Ⅲ期の拡大です（図1-b-3）。この段階で、一気に分布圏を拡大します。ウスリー川の東、アムール下流域全域は、同文化圏に入ります。沿海地方にあった団結文化も、ポリツェ文化の分布圏に編入されます。他の地域は、三江平原では滾兔嶺文化を引き継いだ鳳林文化が、牡丹江流域では、東興文化を引き継いだ河口遺存が展開します（図1-b-1, 2）。但し、これらの文化にもポリツェ文化Ⅲ期の土器あるいはその影響を受けた土器が出土しています。ですから、広範な拡大に伴い一定の影響はあったと思われます。第二松花江流域は不明ですが、後に見ます靺鞨罐が広域展開する時期にも、泡子沿類型の系譜にある土器が認められますので、おそらく同類類型に類する文化が展開したと思われます。

さて、ポリツェ文化Ⅲ期の拡大は、同文化を担った挹婁の南進と関連づけられています。史書に沿海地方南部にいた沃沮が挹婁の進行に苦しめられる記載がありますが、この記載と一致すると考えられています。扶余、沃沮、挹婁というのは、それぞれ社会体制や言語、習俗が異なる集団ですが、これらはそれぞれの集団間・時期によって異なりますが、服属関係や友好関係にあり、敵対関係にありします。ですので、先程申し上げた隣接地域間や広域に類似のものが広がる現象といった交渉関係もまた必ずしも好意的関係でのみ成り立つのではなく、緊張関係を持って繋がっていたと考えられています。

2. 極東における靺鞨罐の成立

次に6世紀後半～7世紀代に極東一円に展開する靺鞨罐について見ていきます（図1-c）。時代が200～300年程の間隔がありますが、これはその間の考古学的様相が不明なためです。

靺鞨罐は、深鉢の器形、口縁部のキザミ入り隆帯を持ち、胴部文様にはキザミを中心としており、齊一的な土器です。図1-c-3がナイフェリト段階と呼ばれる時期にあたります。この段階で一気に分布圏を拡大し、これまで述べた地域全てに展開します。またオホーツク文化の刻文土器はこの靺鞨罐に類似していますが、それは靺鞨罐のこの時期の広域拡散の余波と考えられています。土器が類似するということもありますが、各地域の土器群の構成も変化します。これまで見てきた地域の土器群は他器種構成をとっていましたが、この時代になると、この靺鞨罐と杯の2種と単純構成に変化します。全地域で大幅な土器構成の改変が起こります。この

ことは、調理・食膳といった日常生活での大幅改変を伴うと考えられます。ではこのような変革を促した起源地はどこかということですが、その候補としては、アムール川流域のポリツェ文化が考えられていまして、長頸壺の変遷がスムーズに追えることを根拠としています（図1-c-3上【参考】参照）。

挹婁の後継である勿吉が拡大して、第二松花江流域の扶余を滅ぼします。靺鞨罐形成、拡大の在り方は、この現象と一致するのではないかと見られています。

但し、広域に非常に強い斉一性を持つのですが、良く見ると、その中に地域差が認められます。ここでは、2例を挙げておきます。例1は、第二松花江の靺鞨罐です（図1-c-1）。靺鞨罐そのものは、どこでも出土するタイプですが、ここでは土器の構成に特徴があります。図1-c-1 枠内下段及び右側は、靺鞨罐に伴う土器です。参考として泡子沿類型の土器を挙げました（図1-c-1 下左側【参考】）。比較すればその類似は明瞭です。尚、図1-c-1 枠内下段の左側の土器は、少し新しい段階、8世紀頃の土器ですが、この段階まで泡子沿類型の系譜の土器が残っています。また右側の【参考】は高句麗の土器ですが、第二松花江流域の靺鞨罐の右側に共伴する土器との類似は明らかです。この地域が高句麗領内に近接していたことによるためと考えられます。

また2例目は、牡丹江流域の靺鞨罐です。この地域は、アムール流域に比べ、胴部文様がない、すなわち無文率が高いこと、頸部にボタン状突起を持っている点に特徴があります。（図1-c-2）。図1-b-1は3～4世紀に当地域に展開した河口遺存です。無文土器が主体で、口縁部、頸部にボタン状突起を有している点に特徴があります。この地域もまた在地の土器製作伝統を引き継いでいるのではないかと考えられます。

靺鞨罐という呼称は、靺鞨の推定住地と分布が一致することから付けられています。つまり、靺鞨が使用した土器という意味で、凡そその通りであろうと思います。

靺鞨という集団は、7大部に分かれており、新唐書では数十部に分かれていたとされています。統一的指導者を有しているような、特に強固な等質的な集団でないとされています。その背景には、挹婁、扶余、沃沮といった地域集団を取りこみ、各諸部はそれらの後継と看做されています。ここでみた斉一性の中に残る地域差は、挹婁、扶余、沃沮といった習俗が異なる集団を含んで成立した靺鞨族の実態を反映していると思います。

靺鞨罐の広域・斉一的拡散現象は、画期ではあるものの、一方で地域伝統を有していました。このことからすると、ヒトの移住を伴う交渉関係の増大が存在したとしても、集団転換という現象は想定しにくいといえるでしょう。

またこの広域に渡る斉一性が、前段階までに存在した交渉圏と一致している点にも注目できると考えられます。それまで交渉関係の存在しなかった新たな地域に拡大展開しているのではなく、既存の交渉圏を基盤として、交渉関係の増大により靺鞨罐は広がるのではないかと考えています。但し、時空間的資料の欠落が多いので、今後、この間を埋める資料を追加し、他の考古資料も合わせての総合的検討が必要となると思います。

3 サハリン・北海道北部における考古学的様相（続縄文時代～オホーツク文化刻文期まで）

次に、上述の大陸の諸文化と同時期のサハリン、北海道北部の様相について触れたいと思います。靺鞨罐の広域展開の影響を受け、かつこの段階で大陸系遺物が多く出土するオホーツク

文化刻文土器以前の様相について見ていきたいと思います。

オホーツク文化は大陸の影響が色濃く見える点で非常に特異な現象ではありますが、既にその萌芽は、続縄文前半の北海道北部に見られます。縄文時代前半以前には認められなかった北海道北部とサハリン南部との間に共通文化圏が形成されるからです。そして、この動きが後の鈴谷式を形成に大きく関連していることは疑いないと思います。

また、鈴谷式の段階をオホーツク文化に含めるかどうかは、研究者によって見解が分かれますが、幾つかの文化要素は後の段階に引き継がれています。また分布を見ても、この段階の広がりにはオホーツク文化の素地と考えてもよいのではないかと思います。

このように考えるとオホーツク文化形成に向けて様々な変化があることは明らかですが、北海道北部においては続縄文前半期以降、一脈ながらオホーツク文化との系統性も想定しうるともいえます。ですので、北海道北部の続縄文前半期の様相と併行する時期の「北」の文化的動態を把握することは重要だろうと考えています。

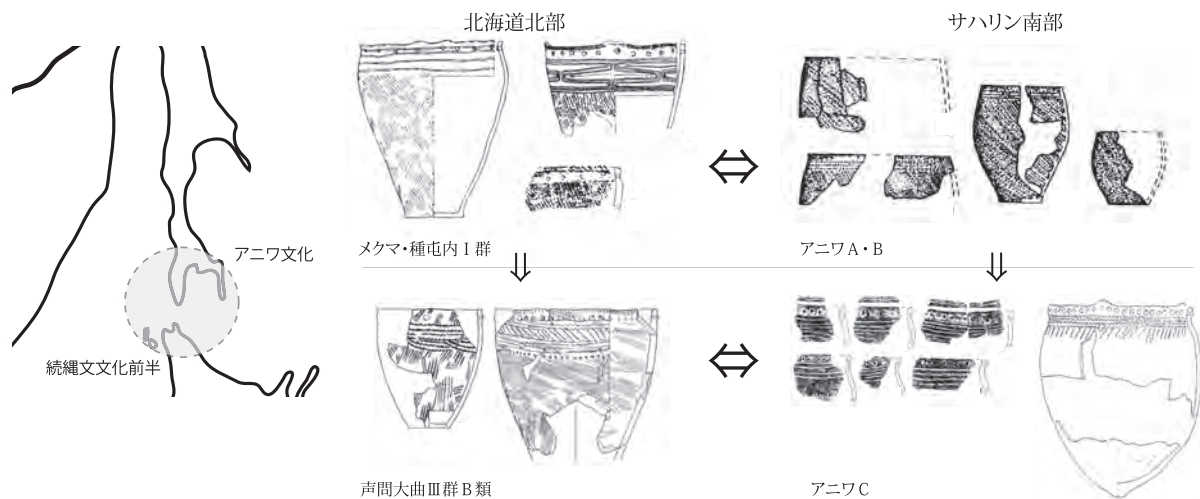
さて、続縄文前半期の北海道北部とサハリン南部の宗谷海峡域ですが、この時期では、変遷が連動する土器群を共有し、集石土抗の使い方に見られるように生活様式の一部も共通しています。北海道北部の土器型式がサハリン南部に拡大したものと解釈されています。一方で、この段階で、縄文時代以来の伝統に存在しない新たな要素を取り込んでいます。縄文時代に求められないため、この新たな要素は、「北方」由来と考えられています。その新たな要素とは、土器の一部に認められる属性と食用のイヌ飼育の流行です。大量のイヌを飼育し、幼獣段階で食用、毛皮用に屠殺しています。またイヌの一部も大型化します。尚、この新たなイヌ飼育のあり方や大型犬はオホーツク文化にも継続することが指摘されています。

続縄文文化、サハリンではアニワ文化と呼ばれていますが、両者の土器の比較がこちらになります(図2-a)。新旧2段階に分けられています。両者の変遷は対応する一方で、地域差が認められます。この背景には両地域の前代や周辺地域の土器群の影響が反映されています。例えば、アニワ文化の古い段階では、無文が多く、変形工字文が欠如しています。変形工字文の存在は、北海道晩期来の伝統が、北海道には残りサハリンには伝わりにくかったと考えられます。また無文土器が多い理由としては、続縄文土器が北へ拡大した時にサハリン南部に存在した無文土器文化と融合した為、サハリンの無文土器製作伝統が色濃く残ったのではないかと推測する見解があります。次のアニワ文化土器の新段階ですが、この段階に丸底土器が含まれます。丸底は、北海道のこの段階では存在しません。この丸底土器が、先程申し上げたこの段階でどこか「北方」から取り入れた新しい要素とされています。

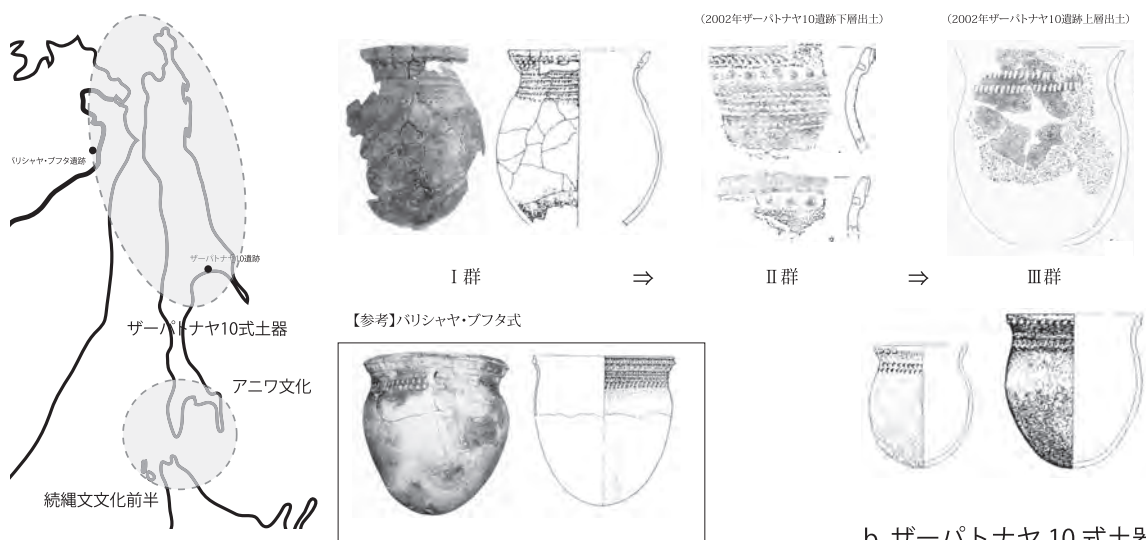
では、イヌの食用飼育・大型犬や、この丸底土器が齎された「北方」とは、どこなのかが問題になります。その候補として私が考えているのが、サハリン中部以北に展開していた「ザーパトナヤ10式土器」文化圏です(図2-b)。

ザーパトナヤ10式は、口縁部の突瘤文、胴部に押引文やキザミ列を持つ丸底を特徴とする土器群です。ポロナイスク周辺に多く確認されていますが、サハリン北部にも出土例があり、サハリン中部以北が分布の中心となります。一部、サハリン南部でも確認されています。

私たちは、2002年に標識遺跡であるザーパトナヤ10遺跡の調査を行いました。結果、無遺物層を挟むザーパトナヤ10式期に属する新旧2つの文化層が確認できました。また貝層でしたの



a. 続縄文・アニワ文化の土器



b. ザーパトナヤ 10 式土器



c. アムール河口部の初期鉄器時代土器

図2 北海道北部～アムール河口部の諸文化

で、良好な動物遺存体を得ることができ、生活様相の復元ができました。ネフスコエ湖岸の立地を反映して内水面漁労が発達していることが明らかとなりました。また注目できる点としては、イヌが大量に出土しており、イヌ飼育が盛行している点です。年齢構成も幼獣、若獣が多く、食用、毛皮採取用の飼育と考えられます。また大型で、北海道北部の続縄文文化やオホーツク文化に認められるものと同じであることが確認されました。すなわち、イヌ飼育のあり方、大型犬の起源の「北方」とは、この地域である可能性が浮上したことになります。尚、新旧2つの層では、動物遺存体の構成に目立った変化はありません。

次に土器を見ていきたいと思います。上下の文化層で出土土器の特徴は異なっています。上部では、厚手の器壁で、口縁部の突瘤文は外面突出しません。胴部文様は、ヘラ、櫛による圧痕列によります。下部出土資料は、薄手で、口縁部に隆帯を持ち、外面に突出する突瘤文があり、頸部には押引文が付されます。

既に得られている資料も合わせまして分析した結果、図2-b I群～Ⅲ群のような変遷が想定できました。従来、一時期を構成していたと考えられていた「ザーパトナヤ10式」は、時間幅を持った一連の土器群であったと判明しました。また詳細は省きますが、属性分析を行うと、新旧の要素が絡み合いながら推移するので、ここで提示したI群～Ⅲ群への変化は系統的に連続したものであるといえます。次に、この土器群の編年位置や周辺土器群との関係について見ていきましょう。

まず大陸側の土器と比較します。既にザーパトナヤ10式がアムール河口部にあるバリシャヤ・ブフタ式と関係があることは指摘されてきました（図2-b【参考】参照）。ザーパトナヤ10式と比較してみると、私が最初期と考えるI群と明らかな共通性があります。このバリシャヤ・ブフタ式とザーパトナヤ10式I群の共通性及びI群からⅡ群以降への継承性から考えて、サハリン中部とアムール河口部では、土器製作情報を共有する文化圏の存在が想定されます。またザーパトナヤ10遺跡では、残念ながら細別時期まで特定できませんが、イノシシ類が出土しています。イノシシ類は、サハリンでの自然分布が確認されていませんから、これも上記のようなサハリンと大陸との交渉関係を背景に持ち込まれたものと考えられます。

ではバリシャヤ・ブフタ式の編年位置はどこにあるのか見ておきましょう。バリシャヤ・ブフタ式が展開したアムール河口部とは、ボゴロツコエからアムール河口部に位置する地域を指して呼んでいます。サハリンや北海道から見れば大陸からの文物が出てくる玄関口にあたる重要な地域です。近年、この地域における、続縄文文化併行―大陸では初期鉄器時代―の研究は、従来知られていなかった資料が続出しています。まだまだ整理が必要な状況ですが、この地域にはアムール下流域と関係のある土器群とサハリンと関係を持つ土器群の2系統の土器群が併存している状況があるだろうと思っています。

図2-cは、V.A. デリューギン氏が2010年に発表した論文から私の見解を加味して整理したものです。図の最上段までは、ゴールィ・ムイス1遺跡の層位的な出土事例で分かっています。真ん中から下は、彼の分類案に私の推定を加えたものです。分析の根拠などの詳細は他日を期すこととして、結論から申しますと、デリューギン氏の言うカコルマ式は、アムール下流域に展開したポリツェI期～Ⅱ期に併行しており、その影響が認められると考えます。紀元前3ないし2世紀～紀元後2世紀の間に収まると考えられます。またエヴォロン式は、ポリツェⅢ期、

紀元後3、4世紀にあたると考えられます。長頸壺や深鉢（図の右下）は、アムール中・下流域で出土するものに非常に類似しています。先に申しあげましたポリツェⅢ期の拡大に伴い、前段階に比べアムール中・下流域の影響が非常に強く出たものと考えられます。

一方、サハリンと関連する土器群ですが、デリュージン氏の言うズメイカ式がカコルマ式併行と考えます。デリュージン氏は、バリシャヤ・ブフタ式もここに併行すると考えています。しかし、カコルマ式・ズメイカ式・バリシャヤ・ブフタ式が、共伴した事例はなく、土器製作伝統の差異が大きいので特定できないのが現状でしょう。少なくとも当該地域では、近接した時期に全く異なる系統の土器群が存在しているとは言えるかと思います。

では次に年代ですが、大陸側の資料ですと、紀元前1千年紀後半以降（サルゴリ式以降）であることは、発掘成果から判明しています。サハリン側ですと、ザーパトナヤ10式のあるサハリン中部では江ノ浦式が展開することが知られています。以上から、続縄文文化前半～オホーツク文化十和田式の間までに収まることは確実といえます。

では具体的にこの間のどこに収まるのでしょうか。サハリン南部の諸型式との関係から推定していきたいと思います。

図3は北海道北部・サハリン南部の続縄文土器から十和田式までの変遷となります。鈴谷式の変遷は、熊木俊朗氏の論文を簡略化して使用させていただいていますが、サハリン南東部の部分に関しては、私が勝手に十和田式土器に併行させています。これまでの研究で明らかとなっている点、問題点を纏めておきましょう。

続縄文文化前半期においては、上述の通り、その後半期に丸底土器が出土しており、この起源が問題となっています。鈴谷式は、南部で縄、北部で櫛の工具による2つの地域性があります。また尖底が認められますが、櫛と尖底については続縄文土器に認められない要素であり、これはどこか「北方」にある土器群と接触・融合して得られたものであるとされています。具体的資料を持って確定できないですが、分布状況から見て、鈴谷式の成立前後に、サハリン北部地域に櫛状工具による施文された丸底・尖底の土器が存在していることは間違いのないと考えられます。そして、続縄文土器と接触した候補として、推定されたりするものが、図に挙げたハンツーザ貝塚出土資料であり、アムール河口部のズメイカ式が相当します。十和田式については、鈴谷式と時間的に近接するにも拘らず、両者の型式学的懸隔が大きく、ここに別型式の影響があったのではないかと指摘されています。つまり文様構成が縄から刻線へ変わることで、突瘤文が付加されること、丸底から平底に変化することなどが挙げられています。

私としては、続縄文前半期及び十和田式成立時に認められる型式学的懸隔を埋める「他地域からの影響」というのは、ザーパトナヤ10式に求められるのではないかと推測しています。ザーパトナヤ10式の初期が続縄文前半併行、同式の後期が鈴谷式後半から十和田式までにあたる、と思っています。また、影響を与えた／与えられたという関係にあるといっても、ザーパトナヤ10式とサハリン南部の諸型式の特徴は大きく異なります。それぞれの地域の土器製作伝統は一程度保たれていることも注目できる点と思われます。

但し、近接時期にあるハンツーザ資料（大陸でのズメイカ式）との関係は不明です。また今回は触れませんでした。近年発見されたピリトゥン式、ナビリ式といった土器も同じく近接時期にあると想定されています。これらの土器群と、ザーパトナヤ10式やサハリン南部の諸

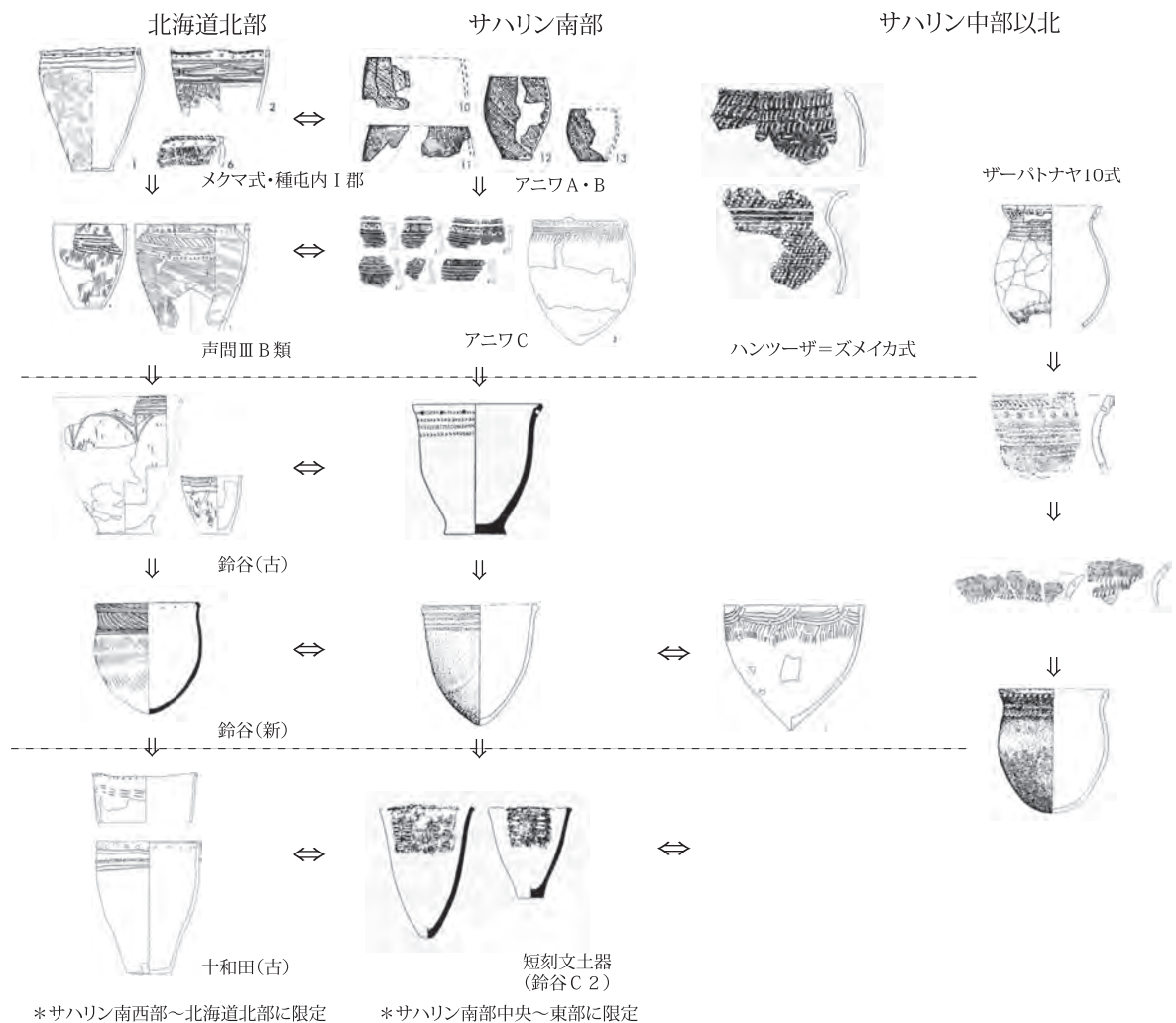


図3 北海道北部～サハリンの土器

型式との時間的・型式間交渉的関係のあり方如何によっては、ここでの想定も変更を余儀なくされます。

ですが、次の点は指摘できると考えています。これまで続縄文前半期～十和田式の間では、続縄文起源の「南」の文化伝統と櫛状工具と尖底使用の「北」の伝統と、2つの土器製作伝統があることが知られていました。しかし、ザーパトナヤ10式は上述のいずれかの時期に含まれることは確実です。そのため、オホーツク文化成立前・形成期においては、少なくとも3系統の土器製作集団が存在したものとされます。

またザーパトナヤ10式土器は、大陸のバリシャヤ・ブフタ式土器と高い共通性がありました。一方で南部の諸型式とも関連を有していたと考えられます。そのため、サハリン南部・中部を介して、北海道北部は、オホーツク文化刻文土器の段階以前から、間接的に大陸と繋がっているといえます。そして想定しうる最上限期は、続縄文前半期といえます。

おわりに

今回の発表では触れる余裕はありませんが、ザーパトナヤ10式後半期、十和田式に後続して

サハリンでは江ノ浦式が、オホーツク文化の刻文土器が展開します。靺鞨罐の広域展開の影響を受けたこの段階の土器は、斉一性が非常に高いことで知られています。

但し、靺鞨罐の影響は全ての文化資料に及ぶものではありません。北海道北部においては、鈴谷式、十和田式段階から系統的連続性を示す物質文化資料が多数認められています。ではその他の地域はではどうかというと、資料例がないので難しいですが、例えば、ザーパトナヤ 10 式の展開したサハリン中部ポロナISK地域における江ノ浦式の底部は丸底風に製作されており、ザーパトナヤ 10 式からの系譜を想定する見解も提出されています。大陸側で靺鞨罐が広域展開をしても地域的伝統を残していたことを考慮すれば、江ノ浦式がサハリンに斉一的に展開する段階でも前代の地域伝統というのは保持されるのではないかと推測しています。

以上の報告を纏めておきますと、極東地域では、紀元前後に隣接する地域間を結ぶネットワークが存在していた。これは靺鞨罐が展開する時期においても温存されており、広域分布の素地となった可能性があると思われる。ですので、大規模な集団転換は想定できないだろうと考えられます。サハリン、北海道に目を転じてみると、オホーツク文化成立前・形成期には、間接的だが、大陸ーサハリンー北海道北部を結ぶネットワークが存在していたと考えられました。このネットワークが形成される時期の上限は、続縄文前半期である可能性がありました。ですから、この時期に大陸の影響がこの段階に認められても不思議ではないと思われます。

またオホーツク文化刻文期における大陸からの強い影響も、大陸で靺鞨罐が広域展開するものと同様の現象で、前段階の交渉圏を踏襲したものであった可能性も考えてよいのではないかと思います。大陸からの文化的影響の増減はあっても、大規模な集団転換は想定できないのではないかと思います。

参考文献

- 天野哲也 1982「オホーツク文化の展開と地域差」『シンポジウム オホーツク文化の諸問題ーその起源・展開・社会・変容ー』大井晴男編 学生社 83～91 頁
- 天野哲也 1998「オホーツク文化の形成と鈴谷式との関係ー礼文島香深井遺跡群を中心としてー」『北方の考古学』野村崇先生還暦記念論集刊行委員会 367～381 頁
- 伊東信雄 1942「樺太先史時代土器編年試論」『喜田貞吉博士追悼記念国史論集』大東書館 17～44 頁
- 臼杵 勲 2004『鉄器時代の東北アジア』同成社
- 内山幸子 2003「イヌ・イノシシ類利用からみる北海道とサハリンの文化的位置」『古代文化』第 55 巻 10 号 46～56 頁
- 内山幸子 2004「ザーパトナヤ 10 式土器期の生業について」『サハリン先史文化における海洋適応の調査研究ー貝塚遺跡のフィールドワークを中心にー』筑波大学人文社会科学研究所 19～24 頁
- ヴァシリエフスキー A. A (木村英明訳) 1992「サハリン島の新石器文化 (概説)」『北海道考古学』第 28 輯 115～136 頁
- ヴァシレフスキー A.A.、グリシェンコ V.A.、フェドルチュク V.D.、モジャエフ A.V. (木山克彦訳)

- 2009「2003～2007年におけるサハリン国立大学による考古学調査」『北海道考古学』第45輯 45～58頁
- 大貫静夫 2010「挹婁の考古学」『国立歴史民俗博物館研究報告第151集「三国志」魏書東夷伝の国際環境』国立歴史民俗博物館 129～160頁
- 小野裕子・天野哲也 2002「鈴谷文化」の形成について『北海道大学総合博物館第5回公開シンポジウム オホーツク文化の形成と変容・消滅』予稿集 北海道大学総合博物館 107～114頁
- 菊池俊彦 1995『北東アジア古代文化の研究』北海道大学図書刊行会
- 木山克彦・シェフコムード, I. Ya.・コシーツェナ, S. F. 2003「バリシャヤ・ブフタ1遺跡出土の土器が提起するもの」『古代文化』第55巻11号 20～32頁
- 木山克彦 2010「靺鞨罐」の成立について『北東アジアの歴史と文化』北海道大学出版会 165～189頁
- 木山克彦 2011「靺鞨・渤海・女真の考古学」『アジア遊学 No.139 特集・アイヌ史を問いなおす 生態・交流・文化継承』勉誠出版 138～147頁
- 熊木俊朗 2003「道東北部の続縄文文化」『新・北海道の古代(2)』北海道新聞社 50～69頁
- 熊木俊朗 2004「鈴谷式土器編年再考」『アイヌ文化の成立』北海道出版企画センター 167～189頁
- 福田正宏 2007『極東ロシアの先史文化と北海道 紀元前1千年期の考古学』北海道出版企画センター
- 前田 潮 1999「オホーツク文化黎明期の宗谷海峡」『海と考古学』第1号 1～8頁
- 前田 潮 2002『オホーツクの考古学』同成社

